秋田魁新報　2021年08月18日付　県央

デジタル一歩一歩

学校現場のICT

部活の練習にも活用

仁賀保高校

小中学校のみならず、県立高校でも1人1台ずつ用意されたデジタル端末。情報を専門的に学ぶ「情報メディア科」を県内で唯一設置する仁賀保高校（にかほ市）では、授業や学校行事のほか、部活動でも端末を活用している。

画面の指示に合わせて体を動かすソフト　テニス部の部員＝7月9日、仁賀保高校

個々にメニューの作成も

7月9日午後4時ごろ、生徒を関前の廊下にソフトテニス部の部員数人が集まっていた。小雨が降るあいにくの空模様のため、活動は屋内トレーニングから始まった。顧問の「スタート」の掛け声で、一斉に反射神経を鍛えるメニューに取り組む部員たち。その様子は一風変わっていた。

「ピッ、ピッ、ピッ」

規則正しい合図に合わせて素早く上半身をひねったり、かがんだり。鳴り響くのは笛の音ではなく電子音。真剣な面持ちで部員たちが見詰めるのは、1台のノートパソコンだ。

画面をのぞくと、網目のように区切られた六つのスペースの中を、紫の円が不規則に移動し続けている。部員はそれを目で追い、円の動きに合わせてテンポよく動いているのだ。

「きつい」「動けない」。時間とともに息が上がっていく。額に汗をにじませながらも、部員たちは仲間と競うように笑顔で取り組んだ。

このプログラムは、同部顧問で情報メディア科の小西一幸教諭（42）が子ども向けの無料プログラミングソフト「スクラッチ」を用いて自作したものだ。参考にしたのは過去にテレビで見たトレーニングマシン。15万円する機械だったが、1時間かからずにマシンの動作を組み込んだプログラムを仕上げた。

1秒ごとに円が動く「イージー」、0・7秒ごとの「ノーマル」、0・5秒ごとの「ハード」の三つのコースを用意。プログラムに少し手を加えるだけで、移動する方向や速度なども変えることもできる。

小西教諭が作った「反射神経を鍛えるプログラム」

プログラミングでのトレーニングを導入したのは、この春。部長で2年の高橋尚海さん（17）は「ボタン一つで簡単に取り組めるし、ゲーム感覚で楽しめるのもいい。自分がどの程度動けるのかが数字で分かるので、目標設定がしやすい」と話す。

小西教諭は「新型コロナウイルスの感染拡大などで万が一休校になっても、生徒たちには1人1台のパソコンがある。自宅で学校と同じトレーニングをしたり、身体能力に合わせて自分でプログラムを作ってもらったりできる」とメリットを口にする。

同校ではこれまで、オンライン生徒総会を開いたり、生徒が県外の大学生とウェブ会議システムを使って交流したりしてきた。今後もさまざまな場面でデジタル端末の活用を進め、新しい学びの形を模索していく。

（川村巴）

〈随時掲載〉

©秋田魁新報社